



平成26年5月2日(金)
校長通心 No.24 校長 馬清教二

チューイングム (三年 柑井子) 灰谷健次郎:「わたしの出会った子どもたち」より

せんせい おころんって
せんせい おころんってね
わたし ものすごくわるいことした

わたし おみせやさんの
チューイングムってん
一年生の子とふたいで
チューイングムってしてもてん
すぐ みつかってしもた

きっと かみさん(神様)が
おぼさんにしらせたんや
わたし ものもいわれへん
からだか おもちゃみたい
カタカタふるえるねん
わたしが一年生の子に
「とり」いうてん
一年生の子が
「あんたもとり」いうたけど
わたしはみつかったらいややから
いややいうた

一年生の子がとった
でも わたしがわるい
その子の百はいも千はいもわるい
わるい
わるい
わるい
わたしがわるい

おかあちゃんに
みつかうへんとおもったのに
やっぱり すぐ みつかった
あんなこわいおかあちゃんのかお
見たことない
あんなかなしそうな
おかあちゃんのかお みたことない
しめくういたたかれて
「こんな子うちの子とちがう出ていき」
おかあちゃんはなきながら
そないいうねん

わたし ひとりを出ていってん
いつでもいく こうえんにいったら
よその国へいったみたいない気がしたよせんせい

どこかへいってしまお とおもた
でも なんぼあるいても
どこへもいくところあらへん
なんぼ かんがえても
あしほかりふるえて
なんにも かんがえられへん
おそうに うちへかえて
さかなみたいにおかあちゃんにあやまって
けど おかあちゃんは
わたしのかお見て ないてばかりいる
わたしは どうして あんなわるいことしてんやろ
もう二日もたってるのに
おかあちゃんは まだ さみしそうにないている
せんせい どないしよ

大地球さんから学ぶ…そして心のシートベルトをひきしめる5月

4月24日は防犯教室があった。講師は、BeFMパーソナリティーの大地球さんで、ラジオの仕事に就く前の20年間、ラビアで防犯巡回指導員をしていた経験談を語ってくれた。万引きの実態はもちろん、後半はコミュニケーションの大切さや生き方まで触れていただきとても勉強させられた。簡単に紹介してみる。

万引きは、法的には50万円以下の罰金と懲役10年以下の刑に服するという犯罪行為であり、缶コーヒー本の万引きで50万円の罰金を払った人も実際にいた。ラビアでは、当初高校生の万引きが多かったが、最近は中学生が多く、その90%が女子で、ファンシー雑貨がほとんど。なかには盗品をコインロッカーに入れて繰り返し、98000円相当の万引きをする例もあった。万引きした子たちと接して疑問を感じるのは、盗んだものを食べておいしいのだろうか？盗んだものを身につけてうれしいのだろうか？ということである。万引きをする人は絶対にバレないと思ってしているけれど、巡回しているプロはすれ違っただけでその人が万引きするかどうかで雰囲気でわかってしまう。バレないと思っているのは本人だけである。万引きを発見すると警備室に連れて行き、万引きの理由をはじめ、名前・学校・住所…を書かせ警察に連絡する(保護者には後から連絡する。なぜなら犯罪をしつかり反省してほしいから。)バトカーで連行されるとき、警備室で聞かれたことをさらに詳しく聞かれ、警察署でまた、さらに詳しく聞かれ調書をとられるため何時間もかかり、やっと保護者へ引き渡される。そしてその書類はすずと残ってしまう。後日、父さん母さんは店の人に一生懸命に謝るのだけれど、当の本人はふてくされていることが多い。「君のことで謝っている父母のことを考えなさい」と言われて初めて頭を下げるケースも少なくない。万引きした子のなかには悪いことをしたらちゃんと謝るというあたりまえのことをできない子も多い。万引きした中学生の責任のとり方は「親に心からきちんと謝る」「店の人に心からきちんと謝る」ということである。

市内のある中学校で同じ話をしたときの感想で「自分は万引きをして大地球さんにつかまりました。あのときの母親の涙が忘れられません。もう二度とやらないと決めました。ごめんなさい。あのときから前を向いて歩いています。家族とも話し合うようになりました。」という生徒がいた。この子は二度と万引きを繰り返さないと確信した。また、万引きの3人組を補導したときに「どういう関係か？」と訪ねると、「友達」と答えた。よく聞くと、その日携帯のサイトで知り合った人を友達とよんでいた。はじめて合った人を友達とはよばないし、悪いことを一緒にする人も友達とはいわない。最近はケイタイやスマホのメールのやりとりばかりに時間を費やしているけれど、母親が赤ちゃんにおっぱいをやるときは必ず赤ちゃんの目を見て話しかける。それがコミュニケーションのスタートであり、みんなもそうして育ってきた。相手の目を見て自分の言葉で話をするのがコミュニケーションの第一歩。スマホをいじって歩く大人をみんなは本当にカッコイと思いますか？君たちは一人で大きくなったわけではないし、今のまま社会に出ていっても一人前にあつかってもらえない。スマホは自分で給料をもらえるようになってから手に入ればいいし、今大切なのは「我慢する」ことを覚えることである。社会に出たら守らなければならないルールが今よりはるかにたくさんあるし、今はその訓練だと思えばいい。「万引きしない」＝「社会のルール」＝「我慢すること」だと思う。みんなが生活するうえで、おかしいと思ったことは言葉でぶつけること。それがコミュニケーションであり、それでもし殴り合いのケンカになっても「痛さ」を覚えることができる。陰でこそこそ言わず、知っていることは隠さないことが大切。本当の友達と一緒に万引きをするのではなく、万引きをとめてあげられる人である。正々堂々と生きてほしい。

大地球さんの話を聞いていて、自分が何十年も前にクラス担任していたときに何回も万引きを繰り返す生徒がいて、左の詩を使って授業したことを思い出していた。この安子ちゃんを当時担任していたのが作家の灰谷健次郎さんである。灰谷さんは、教師をやっているときに「優しさ」というものが、自らを変え、他人をも変える力として存在することを子どもたちから教えられたと言うと同時に、これ以上自分が教師を続けることで子どもたちを傷つけることに耐えきれず退職し作家になった人である。(普通の人にはついていけない「優しさ」「厳しさ」を持った人)この詩を書いた安子ちゃんに灰谷先生は次のような手紙を送った。「…安子ちゃん、ここでしっかりかんがえてください。先生が一番大切にかんがえるべきことは、ドロボーをしたことではなくて、ドロボーをしたそのあとの心だと思います。人間はわるいことをしたあと、かならずといていいほどあまえた心をいただきます。うんとしかられる。しかし、そのあとなんだかはれぼれした気持ちになる。これは人間があまえた心を持っているしょうこです。おとなも、それを見てよくわかってくれたものだと思えます。どちらもとんでもない間違いです。先生はたとえどんな小さいことでも、わるいことをすればえいきゅうにそのつみはきえないのだと思えます。それを一生もって生きていくのが人間のすべてだと思います。安子ちゃん、そここのところをしっかりとかんがえてください。ほんとうにきびしい人間はいつだってじぶんをごまかしたりしません。安子ちゃんが、この詩をかいたことは、そのうそのない人間になろうとしているあかしだと先生は思います。だからこそ先生は、安子ちゃんの詩を読んでなみだかです。安子ちゃん。先生はあなたを信頼しています。今先生がいえることはこれだけです。」…他人事かもしれないけれど、安子ちゃんの「嘘のない心の叫び」と灰谷先生の「真の優しさ」に心動かされるのでは……？

さて、どのクラスも、仲間の様子をうかがいながら自分をわかってもらいたかったり、仲間を理解しようしたり、とにかく今の集団に慣れようと気を遣った1ヶ月だったと思う。今の学級集団で共に生活するのは、たったの1年ぼつきりである！！この中で、自分を知り、判断力を育て、将来をしっかりと見つめ、たくましく歩きはじめなければならない。別にホレホレと急がせるわけではないけれど「自分自身」に甘えていたら、あつという間に力のつかない一年間が過ぎてしまい、一年たっても「笑ってごまかす」だけの人間になってしまうかもしれない。むずかしいことは少しずつ習っていくが、大事なことはこの数ヶ月～1学期で決まる！！と思ってい。学習しようという気持ち、自分で考えようという心、友達からも学ぼうという意志、何でもやってみようという意欲、みんなで何かをつくりだそうという志、これは、今、身につけなければ後からではなかなか大変なことだと思う。心のシートベルトをひきしめながら進む5月がスタートした！！

それとともに、文武両輪と絆シャフトの取組を昨年度より進化させなければならないと考えている。そこで大きな行事に取り組むとき、①最も輝いていた人たち(理由)②最も絆シャフトが太くなった場面(理由)③感動場面④ほほえましい失敗談⑤今回の取組を通過しての成長点と改善点を絶えず意識して取り組んでほしいのである。個人の主観的なフィルターだけで行事を通過するのではなく、集団の人間関係①～⑤に絶えず視点を向けながら取り組むことで、きっと、高め合う集団づくり(集団力＝かけ算)に必要なコミュニケーション能力を身につけることにつながっていくような気がしている。それぞれの集団が大きな共通体験を共有し、様々な人たちのそれぞれの感じ方、考え方、行動、感性に触れることで自分の考え方を再発見したり、それを深めたり、行動に移していければ、絆シャフトは絶対に強靱になっていくと思う。よろしく！！

